



テレジンを語る会 いばらき おたより

# モティール

No.03 2011.10発行

※モティール・・・チェコ語で蝶

\*\*\*\*\*

## テレジンの小さな画家たち展にむけて

～テレジンの子どもたちの絵がふたたび～

1991年9月「茨城県つくば美術館」で「テレジン収容所の幼い画家たち展」が開催されました。

テレジンの子どもたちの絵。その絵に出合った野村路子さんの呼びかけにより全国23ヶ所で巡回展が開かれました。つくばでの展覧会もそのひとつでした。あの時、初めてテレジンの子らの絵に出会ったという方もたくさんおられるでしょう。その時の感動や衝撃を心に留めていらっしゃる方も多いでしょう。しかし、20年もの歳月は、このつくばの地にも大きな変化をもたらしています。たくさんの新たな住民を迎え、家族の中でも世代交代が進みました。当時の子どもが大人になり親になり、我が子に命と平和の大切さを伝えるべき年齢になりました。

テレジンに残された子どもたちの絵と詩、その活動を支えた大人たちのことをもう一度思い出してみましよう。

テレジンでの出来事は、戦争や迫害という悲惨さだけではない、人間として学ばなければならない多くの事柄を伝えてくれます。



私たちは、これまでに野村路子講演会、「15000人のアンネ・フランク」読書会、「ハンナのかばん」紙しばいとパネル展、「コルチャック先生」映画会、原爆の図丸木美術館と埼玉県平和

資料館見学ツアー、テレジンの子らの詩の朗読会など催しを行い、展覧会に向けて学習と活動を積み重ねてきました。1枚の絵の中の黄色い蝶がたくさんのお会いと驚きをもたらしてくれました。この展覧会は1年間の活動の目標点です。テレジンの子どもたちが望んだ「いい明日」に向けての出発点になれるよう、心あたたまるものにしていきましょう。

今なお、世界中のいたるところで戦禍や災害に怯え恐怖と飢えや病に苦しむ子どもが後を絶ちません。いつでも、どこでも、何も問いただすことが出来ないまま犠牲になるのは幼い子どもたちです。

子どもを守りたい。平和と安全を未来に残したい。

\*\*\*\*\*

「テレジン収容所の小さな画家たち

2011年10月18日～23日つくば美術館

絵／アリーチェ・シッティゴヴァー／1930年4月19日生まれ  
1944年5月18日アウシュヴィッツへ

◎野村路子さんのギャラリートーク/初日:10月18日(火)13:00～14:00

## 野村路子さんのメッセージ

1991年9月3日、まだ夏の暑さの中、つくば美術館へ伺いましたね。「テレジン収容所の若い画家たち展」の初日に、講演会をさせていただいたのでした。あれから20年もの長い時間が流れ、今、また展覧会が開催されることを、心から嬉しく思っています。

テレジンと言ってもまったく分かっていただけず、展覧会のサブタイトルとして、「1万5000人のアンネ・フランクがいた」とつけ、主催する私の会は「アウシュヴィッツに消えた子らの遺作展を成功させる会」という長いものでした。

「…この絵を通して、命の大切さ、希望を持って生きることの意味を、日本中の子どもたちに伝えたい…」という私の呼びかけに、全国からたくさんの手紙や電話がありました。その中に「ちょうちょが飛んで お花に止まる お日様いっぱい 春の夢…」と、詩を書いたお手紙がありました。それが、寺島罔子さんとの出会いでした。私の小さな呟きが、波紋を描き、新し

い波紋をさそい、いつの間にか潮騒のような大きなうねりになったことを、今もはっきりと覚えています。多くの方との出会い…新座展の実行委員長だったSさんが、「あの1万5000人の子どもたちだって、生きていたらたくさん素晴らしい出会いを得たはず。それを、今、私たちが代わりに得ているのだと思います」と仰ったのも一。

今、私の手元に、あの時のつくば展の感想文集があります。

「お父さんがいて、お母さんがいて、弟がいて、私がいる。これがどんなに幸せなことか。ふだんは気づかずにいる。それをいくつもの絵が私に教えてくれた…」と書いてくれた15歳の高校生。あなたは、もうお母さんになって幸せに暮らしているでしょうか。あの時、感想を書いてくれた子どもたち、20代、30代の方たちが、子どもを連れて、もう一度、テレジンの子どもたちに会いに来てくれたらいいなと夢見ています。



野村路子（テレジンを語りつぐ会代表）

1937年、東京生まれ。早稲田大学仏文科卒業。コピーライター、タウン誌編集長を経て、ルポルタージュ、エッセイなどを執筆していたが、テレジンの子どもたちの絵と出会い、91年より『テレジン収容所の若い画家たち展』を主催。生き残った“テレジンの子どもたち”ヘインタビューをかさね、現在も執筆、講演活動を続けている。

### 野村路子さんのギャラリートーク

初日10月18日(火) 13:00~14:00 つくば美術館第2展示室

野村路子さんが作品を紹介しながら開場を回ります。貴重な体験です、是非お越し下さい。



## 原爆の凶丸木美術館&埼玉県平和資料館を訪ねて

6月16日(木)、8名で埼玉県「原爆の凶丸木美術館」と「埼玉県平和資料館」を訪ねました。丸木美術館の「原爆の凶」は、広島に原爆が投下された直後に現地を訪れ、救援活動に従事した丸木位里&俊夫妻が描いた作品群です。1950年に「幽霊」、1982年に「長崎」まで32年間15点の屏風画の大作が描かれました。水墨画の位里氏と油彩画の俊氏の個性が融合した共同製作です。原

爆の非情さ、無情さが怒濤のように押し寄せ、地獄に迷い込んだような衝撃でした。

同時に、「チェルノブイリからの見えるもの」と題して、貝原浩「風しもの村チェルノブイリ・スケッチ」と広河隆一・本橋成一「写真展」が開催されていました。

平和資料館では「テレジン収容所の絵画パネル展」と沖縄戦などの戦争の記録を見学しました。収蔵庫では、大きな木箱に小分けされて収納されているパネルを1枚1枚抜き出

し、約120枚の中から76枚、今回のつくばの展示用に選定しました。約2時間、立ち通しで立ち会ってくださった野村路子さんに感謝いたします。

丸木夫妻の「原爆の凶」から始まり、貝原浩氏のチェルノブイリの平穏な日々を重ねる原発の恐怖、広河隆一・本橋成一氏のリアリズム、平和資料館での戦争の記録と、あらためて「テレジンの子どもたちの絵画展」開催の意味と意義を再確認することでできた1日でした。(矢澤容子)

### 映画会「コルチャック先生」

アンジェイ・ワイダ監督作品

5/29 於:つくば市市民活動センター



### 「すべての子供たちは、生命に対する固有の権利を有し、生存し、成長していくことが可能な限り保障されている」子供の権利条約

ポーランドのユダヤ人ヤヌシユ・コルチャックはこの子供の権利条約の精神的な父(ユニセフ)と呼ばれ孤児院院長としてこれに基づいた教育を30年間実践した著名な教育者であり作家、医者であった。しかし、第二次世界大戦が始まり子供たちと共にワルシャワ・ゲットーに閉じ込められ、1942年8月、彼の子供たち200名とともにトレ布林カ絶滅収容所へ移送されナチスの大虐殺の犠牲となった。

2011年5月29日(日)雨天  
朝から降り続く雨の中、市民活

動センターに設営した会場には一時間前から来場者が続き上映間際には受付に列ができるほどの50人超の満員状態となりました。“字幕が読めない” “こんなにしんどい状態で映画を見たのは初めて、心も痛かったけど体も痛かった”とのご感想(反省)。窮屈で換気も悪く蒸し暑い会場の中2時間、皆さん集中して熱心にスクリーンに見入っておられ、“大変良い映画でした(多数)” “いろんな人に教えたい” “生きている喜びを感じた” “A.ワイダの映画は全てすごい!言葉が出てこな

い”と感動していただきました。上映後の交流会でも感想や意見が出されました。アンケートや交流会より抜粋しますと、“戦争の悲惨さを再確認、日本人も真珠湾攻撃等もあり反省、自分で良く考えて行動したい” “大戦後も世界中で戦争は続いている、いつになったら戦争による苦しみが無くなるのでしょうか、右傾化しそうな日本の若者に見てもらいたい” “あの時代は過去のものでは無く震災後の現代と相通ずるものを感じる” “今の福島の子供たちのことを考えさせられた”と過ぎ

